

「かかりつけ医」は地域の「聖」に



每日新聞大阪本社 論説委員

池田 知隆

かつて町に患者がいれば、自転車やスクーターに乗って駆けつけるお医者さんがいた。いつも黒い診察かばんを手にしていた。昨年暮れから大ヒットした映画「ALWAYS 三丁目の夕日」に、そんなお医者さんが登場する。いまや医師が往診する光景を町で見かけなくなっただけに、とても懐かしい思いにかられた。あれから町のお医者さんは、何が変わり、何が変わっていないのだろうか。

この映画の舞台は、1958(昭和33)年の東京。近所中が知り合いで、珍しいテレビの前に人だかりができたのは、大阪も同じだった。商店街はいつも人であふれ、誰もがいつかは幸せになれると夢を見ていた。モノがあ

ふれている現代とは違って、足りないモノだらけでも、人の"優しさ"とか"思いやり"だけはいっぱいにあふれていたころの郷愁をそそる物語だ。

そこで三浦友和さんが演じる宅間医師は、 近所の子どもたちから、太い注射を打つので アクマ(悪魔)先生と呼ばれ、恐れられてい る。私が幼いころにも、自宅で熱を出し、寝 かされた布団の横に白衣のお医者さんが駆け つけてくれた。昔は何かというと、すぐに注 射だった。そのとき、いやに注射器が太く見 え、泣いてばかりいた記憶がある。だが、あ の医療器具が詰まった黒い診察かばんを見る だけで、子ども心にも安心感が広がったもの だ。

いつも物静かで、上品なアクマ先生は近所の居酒屋に通っている。お酒を飲んだあと、スクーターを押しながら帰るが、家には誰も迎える者がいない。自宅の茶だんすの上には家族の写真が置かれ、妻子は戦時中の空襲で亡くなっていた。電気もつけず、暗い部屋に一人たたずむアクマ先生から、戦争の傷を抱えて生きる悲しみが伝わってくる。

そんな優しいアクマ先生が、住民に頼まれてサンタクロースに扮し、子どもにクリスマスプレゼントの万年筆を渡すシーンも強く印象に残る。そのころのお医者さんは、人々が一生懸命生きている姿を見つめ、地域のなかで信頼を集める存在だった。もちろん、今もそんな医師がいるだろうし、これからもそうであってほしいと願わずにはいられない。だが、現実にはお医者さんと患者との距離は少しずつ遠のいてはいないだろうか。

今では医師の医療をめぐる姿勢、いわゆる「父親的温情主義」(パターナリズム)への受け止め方が変わってきている。かつては、半人前の子どものためにいろいろ世話を焼く父親のように、無知な患者の代わりに一生懸命に父性愛をもって病気に挑んでいく医師に患者の側から全面的な信頼があった。

だが、時は流れ、「患者の権利」「個人の意思決定尊重」が主張され、がんの告知などをめぐって「インフォームド・コンセント(十分な説明に基づく合意)」が広がっている。医師が、相手に十分な情報、判断材料、機会を与えずに、相手のためと言いながらも、実は自分にとって利益になる方法を選んでしまうように、患者からすれば「大きなお世話」と言いたくなるケースが目立ってきたからだ。患者の理解が得られない医療は、父権的で一方的な押し付けとして批判を浴びるよう

になった。

今年は、郵政民営化に次ぐ医療制度改革の始まりの年と言われる。診療報酬を引き下げても、医療の質を落とさないための改革や工夫を大胆に実行し、暮らしの基本である医療制度の崩壊を防ぐことが大きな課題になっている。

その論議の中で、治療や薬の値段などの明細が分かる領収書の義務付けをめぐる日本医師会の対応には、率直に言って理解に苦しんでいる。「複雑な診療報酬のまま領収書を出せば、説明が難しく、患者側が混乱する」という医師会の見解は、一種のパターナリズムのような問題のすり替えに思えるからだ。複雑な診療報酬だからこそ、きちんと説明する責任があるのではないだろうか。

さらに日医幹部が記者会見で「医療内容を落とさざるを得なくなったら大変だと心配している」と語り、医師会としての発言に悲しくなった。国民からの反感をかわないだろうか、と憂慮さえしている。もちろん、診療報酬引き下げによる収入減を補てんするために投薬量や検査を増やされたらもっと困る。患者側に診療報酬の内容を明確に知らせてこそ信頼が得られる。

今日、高度な医療の恩恵を受けられる点では「三丁目の夕日」のころとは比べものにならない。だが、地域の高齢化の現状は厳しく、これからは先端医療よりも地域密着型医療がより切実に求められていくだろう。

町のお医者さんは、いつの世でも「聖」であってほしい。「聖」の文字は、「耳」を「呈」すると書く。つまり、自分の耳を相手に差し出すことを表している。人々の悩みや苦しみや悲しみ、命の叫びを聴き続けることこそ文字どおり「聖」だ。医師は、地域に生きる現代の「聖」としてよみがえってほしい。